

# 紙一重で馬鹿

工学部  
情報システム創成学科3年

阿部 大佑

私の通っている学校は、鶴賀高校というレベル

の高い進学校だ。偏差値一位の高校も十分に狙えたのだが、家から遠く、勉強に支障を来すといふことで、私は家から近く、その中でも一番偏差

値の高い高校に入った。母は私に対して勉強を熱心に教え、父は厳しく、大学は旧帝國大しか認めないと言っている。私は父にそう叩き込まれたので、私も当然と思うようになっていた。

高校での成績は常にトップだった。しかも、美人であり、モテる。この前は、成績が万年二位の鈴木君に呼び出されて告白された。しかし、私はこう言つて断つた。

「鈴木君、君は、そこここ頭がいいが、私より頭

良くなつてから告白しろ。私より低能な奴が釣り合うと思うなよ！ 馬鹿め！ なにより、私の貴重な時間を使わせるな！ 目の前から消え失せろ！」

そう、私は、私より頭の悪い人間が大嫌いなのだ。そして、そんな奴らと付き合おうとも、友達になると、

ろうとも思わない。

その後、鈴木君は学期末テストで三位に陥落してしまった。少し悪いことした気がしないでもない。

この春で、私は高校二年生になった。新学年の初日なので、クラスメイトが変わった。周りは早速、新しい友達を作り始めていた。運が悪いのかわからないが、あの鈴木君とも同じクラスだった。私は、レベルの低い友達を作りたくないのに、参考書を開き、受験勉強に励んでいた。

チヤイムが鳴り、みんなが席に着き、二十分ほどして新しい担任の先生が来た。

「今日からこのクラスの担任となる、体育担当の水元だ。まあ、みんな絶対一回は俺の授業を受けようと思うなよ！ 馬鹿め！ なにより、私の貴重な時間を使わせるな！ 目の前から消え失せろ！」

「転校生の武田樹です！ 百万払つて入りました！ 前の学校でのあだ名は、馬鹿な方の武田です！ よろしくお願ひします」

なぜだか、土下座をしていた。クラス中が唖然としたままだつた。とりあえず、この武田というやつが馬鹿だということは理解した。先生は、

「あー……こんなやつだが、みんな仲良くしてやつ

「えっ！ なんだろう！」

「もしかして、転校生とか？」

「あっ！ そういうえば、職員室で話して人がいた気がする」

などと、騒がしい声が沸いてきた。それに対して先生は、

「まあ、落ち着け、みんなの想像の通り、転校生だ。入つていいぞ」

一人の男子生徒が入つてきた。そして、黒板の前に立ち、チョークで黒板一面すべてを使い、何かを書いた。恐らく名前を書いているのだろうが、汚すぎて字が読めなかつた。

「転校生の武田樹です！ 百万払つて入りました！ 前の学校でのあだ名は、馬鹿な方の武田です！ よろしくお願ひします」

なぜだか、土下座をしていた。クラス中が唖然としたままだつた。とりあえず、この武田というやつが馬鹿だということは理解した。先生は、

てくれ。武田、そこの用意してある席に座れ」

先生は私の隣の席を指差した。名前順だから仕方がないが、できれば変えてほしいものだった。

武田は、

「はい！ わかりました！」

と、席に着いた。そして、

「よろしくね！ 優子さん！」

握手を求め、平然と小学校の時みたいに机同士をくつづけてきたので、私は腹が立ち、彼の腹を

一発殴ってやった。ちなみに私は優子ではない。これが、私と武田の初めての出会いだつた。

それから、三ヶ月がたつた。武田はすぐにクラスに馴染んだ。しかし、武田は僅か三ヶ月あまりで数々の馬鹿を行つた。

その二

鶴賀高校では、朝読書の時間がある。武田にとつて、初めての朝読書の前日のことである。先生に

本を持ってこいと言われ、武田はこうすれば忘れないだろうと言つて、自分の左右の頬に油性ペンで『本』と書いた。この時もクラス中が笑つていたが、次の日もまだ『本』と書かれていたので、またもや笑われていた。そして、そこまでしたので、流石の彼も忘れはしなかつたのだが、持つてきただが、本は本でも官能小説だつた。カバーもつけずに持つてきて、黙読するはずの読書の時間で音読しようとしたので、先生にこつぴどく怒られ沒収されていた。

ただでさえうるさく、集中が出来なかつたのに、矛先が私の方に向いた。ムカついたので私は携帯電話を取り上げ、へし折つてやつた。

「おい、武田、携帯電話をしまえ、没収されたいか先生は呆れた表情で言つた。だが、武田は、私の方を指差しながら反論した。

「由里さんは別の科目を勉強して注意されないのに、なぜ、僕だけ注意するのですか？ むしろ、性についての勉強をしている、僕の方がいいと思ふんですけど！」

武田が膝を突き絶望的な表情をするかと思いきや、急に、

「ふふふ、ははははは、ふーははははは！」

と笑いだし、立ち上がりつゝ、

「今、僕の携帯は折られてしまつた。だが、残念だつたな！ それは本物だ！ こんなこともあろうか」とフェイクをたくさん用意しておいたのさ！」

と言つた。カバンから三十個以上の携帯電話（恐らくすべて起動しないやつ）が出てきた。

「……こんなに偽物は用意しておいたのに……」けれども、膝を突きまたもや絶望的な表情になつた。やはり馬鹿だつた。

動画を大音量で見始めたのである。ちなみに、内容はロリ系だつた。

「おい、武田、携帯電話をしまえ、没収されたいか

先生は呆れた表情で言つた。だが、武田は、私の

その一

身体測定のため、百メートル走があつた。その

百メートル走をジャスト百秒で走り切つた。あまりにも遅く、歩いた方がまだ早い速さだつた。武田曰く、

「途中で珍しい形をした石を拾つたんだ。ほら、見て、これ絶対アーメタルだよ！」

そのアーメタルと武田が思つている石は、現在、黒板の上に大事に飾つてある。もちろんアーメタルでもなんでもない、ただの石ころである。

その三

武田は必ずと言つていいくほど、授業を真面目に受けない。初回の授業ですら真面目に受けていな

かつた。授業を受けずに何やつているかというと、うるさい寝言を言いながら寝ていたり、教科書ではなく週刊少年系統の雑誌を立て、こそそそと早弁をしたりしていた。

ここまでまだよかつた。しかし、保健体育の授業、私はもちろん大学受験に関係のある科目、つまり、保健体育とは関係のない勉強をしていていたのだが、武田はとすると、携帯電話でアダルトな

#### その四

中間テスト中、始まって十分で手を挙げ大声で、

「先生、おしつこがしたいです。トイレに行つても、よろしいでしょうか！！」

と言つた。

「まだ始まって十分も経っていないぞ……まあ、いい。早く行つて来い」

この時は先生も、許してくれたが、それから二十分後またもや、

「先生！お腹が痛いです。トイレに行つてきてもよろしいでしようか！」

「さつき行つただろ！それに、テストはあと十分で終わる。我慢しろ！」

これには、流石の先生も許さなかつた。それに対して武田は、

「我慢しろとおっしゃるのですね。わかりました。どうなつても知りませんよ」

と言つた。テストの最中は、武田から小声で「やばい、漏れそう、超やばい……」と何度も聞こえたそうだ。そして、テストが終わつた直後、猛ダッシュでトイレに駆け込んでいった。その途中、

「あーっ!! やばい!! ちょっと漏れた!!」という声が聞こえた。漏らした形跡はなかつたのだが、廊下は少し臭くなつていた。そして、武田の零点の答案用紙にはびつしりと、下品な言葉が汚い文

字で書かれていた。

やつぱり武田は下劣で馬鹿だつた。

アンダーグラウンドなサイトも覗いていた。きっと、その際にウイルスに感染し、乗つ取られたのだ。

夏休みが終わり、新学期となつた。一学期中に行つた席替えで武田と離れたからよかつたが、二学期が始まつてから席替えでは、運が悪く、また武田の隣の席になつてしまつた。受験まであと、一年半ほどしかないので、最悪だ。私に害がなければ良いものの、私の内職（受験勉強）の邪魔をするから厄介だ。出来ることなら変えてほしいものだ。

セキュリティソフトも入れていたが、ウイルス作成の際にセキュリティを解除して、そのまま放置してしまつていった。感染したウイルスを消そうとしても、なぜだか消せない。というより、セキュリティソフトが起動できないようになつていて、PCを乗つ取られているので当然であるが、何でことだらうか。

そんな私だが、最近、受験勉強以外の楽しみを見つけた。それは、コンピュータだ。コンピュータは調べれば調べる程、奥が深い。夏休みの間は、受験勉強の休憩として、コンピュータについて、調べたり、プログラムをいじつたりしていた。二学期に入つてからは、コンピュータウイルスについていろいろ調べていた。昨日なんか、自分でウイルスを作成して、実験として父のPCにばら撒いたりしていた。もちろん、ばれないよう直しておいた。

本日の授業が終わり、家に帰つて、ノートパソコントを起動させた。その時、webカメラを見て、私は愕然とした。カメラが起動していた。昨夜、コンピュータウイルスについて調べるにあたつて、

このノートPCは、つい最近買つたばかりで、買ひ換えてほしいと、親に頼みづらい。しかしながら、PCを使わなければ、私の楽しみがなくなつてしまふ。一応操作はでき、インターネット等もできるが、明らかにwebカメラが起動している。遠隔操作もされていて、私のPCは覗かれている可能性がある。なので、あまり使いたくない。一回ネットワークの接続を解除し、セキュリティソフトを使おうとしてみたが、やはり、起動できない。その後、夜中ずっとと考え、いろいろ試してみが、解決できないまま、朝がやつてきた。一睡もしていいないが、学校へ行かなければならない。

学校へ到着し、授業が始まつた。一限目は何とか起きることが出来たが、二限目は保健体育だ。受験に全く関係ないと、思うとすぐ寝たい。し

かも、PCのことを考えると授業に集中出来ない。うとうとしながら、どうしようか考えていると、隣から、

「大丈夫？ 顔色が悪いけど？」

と言う武田の心配する声がした。寝ぼけていたので、意外と人のことを心配してくれて優しい奴だと思つてしまつたが、ここで私は、保健室で仮眠をとる口実ができたと思い、

「ああ、ありがとう。実は昨日から少し体調がよろしくない。だから、保健室に行くことにする」と言つて、立ち上がり、保健室に行こうとした。

すると、

「よし！ 僕が連れて行くよ！ 先生！ 由里さんが体調不良を訴えているので、保健室まで連れ行きます！ いいですよね！」

と、私一人でも行けるのに、武田が勝手に名乗り上げた。

「ああ、なんでお前が連れて行くのか分からんが、いいぞ。どうせ武田は、いても俺の授業まともに受けんんだろ」

先生が許可したことに対する突つ込みをいたしかつたが、体力を使うため、いれなかつた。その結果、

「やつた！ ジやあ、僕は保健室で由里さんと保健体育の実習行つてきます！」

「流石に齊藤が弱ついてても、秒速一メートルの武田には押し倒されんだろ。とにかく、さつさと行つて来い」

「はーい」

というように話が進み、保健室まで武田と一緒に行くこととなつた。

正直に言うと、体調は悪くない。しかし、現在の私の精神的な疲労は大きい。親しい友人が居れば相談できるのだが、学校内には、一人もいないし、親にも相談しづらい。誰かに話せばちょつ

とは気が楽になると思つてしまい、保健室に行くまでの道中、武田にいろいろと話してしまつた。どうせわからんだろうと、高を括つていたが、全てを話すと、武田は、

「えっ！ 由里さん一回ウイルス作つてんの！ それって犯罪じゃないの？ つまり：由里さんは：犯罪者！」

この時、なぜ私は武田に全て話したのだろうかと、後悔した。それとともに、私の精神が相当病んでいたことは、はつきりと分かつた。

「由里さんの作ったウイルスって、どんな感じ？ あと、そのPCどんな感じで感染されたの？ 見せて、見せて！」

何事もなく、家に到着した。今日は、母も父

「えー見たい、すぐ見たい。見させてくれないと、ここで、きやーー！ 変態！ 犯罪者！ って叫ぶよ。いいの？」

馬鹿が何かに興味を持つと、ここまでうざいとは知らなかつた。しかし、実験とはいえ、一回ウイルスをつくつて親のPCに撒いたことは確かである。犯罪と言えば立派な犯罪だ。そして、武田に噂を広められると思うと不快である。だから私は、「わかった、わかった。耳元でギヤーがギヤー喚くな。見せてやるから」

と言つて、今日の放課後私の家に連れて行く約束をした。武田は、非常に気持ちの悪い喜び方をしていたが、無視をして、保健室に向かつた。昼になるまで保健室で寝て、五限目の授業で復帰した。授業中、武田は、こつちを見ながらニヤニヤして気持ちが悪かつたので、先生が板書している隙を狙つて、十回ほど消しゴムを思いつきり投げ、顔面にぶつけた。至近距離だったため痛がつていた。いい気味である。

放課後、武田に十メートル以上近寄らないでついて来るよう指示させ、家に向かつた。ストーカーのようについて来るので、助走をつけて殴つてやろうかと思ったが、面倒なのでやめた。

も仕事でいないので、変な誤解を生まなくて済むようだ。

武田を私の部屋にあげた。

「へーここが、由里さんの部屋か……いい匂いだ！」

おっ！ あんなところにタンスがある！ よ

しつ！ 早速、下着を探して、何枚かもらおう！」

と、タンスに近づこうとした。下着をあげて、こいつが死んでくれるなら、今、穿いているのも含め、すべて喜んで渡してやるが、そんなことはないでの、

「おい！ パソコンなら見せるからさつさと、見て帰れ！ それから、そのタンスに触れてみろ、お前の口に父の下着を突っ込んで窒息死させてやる」

私は武田を脅した。

「えつ……それは流石の僕でも嫌です」

どうやら、効果抜群のようだった。

PCを起動させ、状態を見せ、説明した。途中、

武田は完全に寝ていた。十説明して、一も理解していないようだ。あれだけ見たがっていたのに、こんな態度を取られると、非常に腹が立つ。次に、

私の作ったウイルスを見せようとすると、「喉かわいた……飲み物欲しい！ 持ってきて！」

そうじやなかつたら、勝手にトイレの水飲むよ！ いいの？」

と、武田が駄々をこね始めた。取りあえず、近くにあったPCの充電器のコンセントを武田の鼻に突っ込んでやった。しかし、私も喉が渴いていたので、飲み物を運んでやることにした。

「そこで待っている、パソコンは触つていが、他に物に触れたら、学校で公開処刑してやる」

たぶん、べたべたと、いろいろなものに触るだろうなど思いつつ、飲み物を取りに行つた。途中、家のチャイムが鳴つた。新聞の集金だったので、お金を渡して帰らせた。その後、麦茶をコップに入れ、ついでにお菓子もトレーに乗つけて部屋まで運んだ。部屋に戻つてみると、武田は、人のパンツを頭から被りながら、パソコンに向かつて、

「おい！ やつと見つけたぞ！ 変態め！ 僕は、ウイザード級のスーパーハッカーだ！ これ以上、由里さんを覗き見てみろ！ そんな時はお前をレープしてやる!!」

と、言つていた。私は、トレーの上の飲み物とお菓子を机に置き、「勝手に魔法使いにでもなつていろ！」

と、全力でトレーを武田の頭にぶつけた。少し、強すぎたのか「ぎやふん」と言つて、気絶した。

PCを見てみると、そこに映つていたのは、私の中学時代の友人、智子ちゃんではなく、引きこもりで気持悪い顔をした智子ちゃんの兄だつた。どう

やら、武田はこいつに向かつて、私のパンツを被りながら、レイプしてやるだのなんだと、話していたらしい。変態過ぎるので、後程、父のパンツを口に突っ込んであげようと、心に誓つた。

氣絶した武田はほつておいて、どうして、モニターにそいつの顔が映つていたのかを調べようとして、マウスを動かした。すると、すべて消え、元のデスクトップ画面に戻つてしまつた。しかも、よく見ると、webカメラも正常で、セキュリティソフトも起動している。PCが直つたのだ。

もし、武田の言うことが本当なら、武田は相当なPCの知識を持ち、私がいない十五分程度の間でPCを直し、敵を見つけ、逆ハックし、私のパンツを被つたということになる。だが、そんなこと、本物のウイザード級のハッカーでなければ不可能だ。この馬鹿がそだだというのか、などと考へながら武田がいる方を見た。武田は、すでに起きており、「ばれちゃつたようだね。実は僕は、さつきも言つた通り、スーパーハッカーなんだ。隠していた理由はね……」

と、未だにパンツを被りながら、いきなり語り始めるので、私は二、三回殴つて、パンツを引つべがし、正座させ、「続きを話せ」

と命令した。

聞くところによると、武田は高校に来るまでは少年院に入っていたようだ。十歳の頃、ネット上にウイルスを撒き、世界中の経済に合計、十億ドル以上の損害を与えたことが理由だ。本人曰く、

平凡な人生がつまらなくなり、楽しいことが起きるかもと思い、やつてしまつたようだ。結局、虚無感しか生まれなかつたそつだが、少年院では改心し、人生を楽しむようになった。馬鹿なことをするのは、みんなにも人生を楽しんでもらうためだそうだ。それから、馬鹿を演じていたのもあつたが、実際問題、情報に関する科目以外は、全くできないらしい。だからこそ、天才ハッカーであることを隠しているとも言つていた。

私はそれを聞いて、武田のことを見直した。馬

鹿だと思つてゐたが、情報工学に関しては、私より頭がいい。恐らく、天才と言つても過言ではないだろう。そう思うと、なんだかドキドキしてきた。私は私より頭がいいに対しては惚れっぽいのだ。だから私は、

「私は今、君となら付き合つてもいいと思つてゐる。私は馬鹿な人間が嫌いだ、私以上の学力じゃないと、付き合うことはおろか、友達にもなりたくないと思つていた。だから、君のことは嫌いだつ

た。だけど、君は私より頭がいい。学校の勉強は出来ないかもしれないけど、情報工学に関しては君は天才だ。現に私のパソコンを直してくれた。武田、いや、樹、私と付き合つてくれ」と、私の想いを樹にぶつけた。

「いいよ」

樹は優しい笑顔で返してくれた。

「な、な、なんで、ですか！ 齋藤さん！ この前、私より馬鹿な奴とは付き合わない！ って言つたじゃないですか！ なんですか！ なんで！ こんな馬鹿と付き合つてゐるんですか！」

その後、私のPCが何故ハッキングされていたのかを説明してくれた。どうやら、感染源はメールらしい。昨日、久々に智子ちゃんからメールが

来たことを思い出した。そのメールにウイルスが入つていたようだ。智子ちゃんの兄が智子ちゃんのPCを勝手に使い、私を覗き見たいがために、私のPCにウイルスを乗つけて送つた。だから、案外簡単に直せたとも樹は言つていた。

私は樹と夜まで、学校について話したり、情報工学について教えてもらつたりし、夕飯前に樹を

と言つて、追い返してやつた。それから、なぜか、

鈴木君はテストの点ワースト一位を目指すようになり頭がいい。恐らく、天才と言つても過言ではないだろう。そう思うと、なんだかドキドキしてきていた。私は私より頭がいいに対しては惚れっぽいのだ。だから私は、

あれから数日が経ち、私が樹と付き合つてゐることは、すぐに広まつた。昼食と一緒に食べたり、

一緒に帰つたりすれば、流石に馬鹿な奴らでも気付くようだ。私たちのやり取りを夫婦漫才と言う輩も現れたくらいだ。この前なんか、鈴木君が私の前にやつてきて、

「な、な、なんで、ですか！ 齋藤さん！ この前、

付くようだ。私たちのやり取りを夫婦漫才と言う輩も現れたくらいだ。この前なんか、鈴木君が私の前にやつてきて、

「な、な、なんで、ですか！ 齋藤さん！ この前、

付くようだ。私たちのやり取りを夫婦漫才と言う輩も現れたくらいだ。この前なんか、鈴木君が私の前にやつてきて、

現在私は、五限の保健体育の授業を受けている。

受験に関係ないと思い、情報処理の勉強、つまるところの内職を行っていた。樹はとすると、いつも通り、携帯の動画を大音量で見ながら保健体育の実習の勉強をしていた。ちなみに今度は美女系である。しかし、私は心が広いので前のように止めなかつた。すると、先生が、

「おい、武田、携帯仕舞え、うるさいぞー」

と言つた。それに対し樹は「由里さんは別の科目を勉強して注意されないのに、なぜ、僕だけ注意するのですか？」むしろ、性についての勉強をしている僕の方がいいと思うんですけど！」

また同じことを言つているが、私は心が広いので、前のように携帯を折らなかつた。

「おい、齊藤、お前もいつもみたいに、なんか言ってやれよ」

「ふつふつ……甘いですよ！ 先生！ 僕と由里さんは付き合っています。ゆえに、由里さんが何か言うわけないじゃないですか！ ふーはははは」

下衆のような高笑いだつたが、私は心が広いので、前のように殴らなかつた。  
「ああ、そうなのか。でも、みんなの邪魔になるから、さつさと携帯仕舞えよ」

私は心が広い……

「あと、先生！ 動画を見てたら、興奮してきたので、トイレで抜いてきて……」  
だがしかし、

「私は、そこまで許した覚えはない！！」

と叫びながら、参考書で樹の顔面をフルスティングで殴りつけたので、樹は気絶してしまつた。結局、私が保健室まで運ぶこととなつた。

樹を保健室で寝かせ、樹の顔を見て、最近の出来事を思い返した。この馬鹿のおかげで、毎日が楽しく感じようになつた。前までは、勉強だけが全てで、馬鹿が嫌いだつたが、今は勉強が全てではなく、馬鹿も悪くないと思うようになつた。いろいろ考えていると、段々と幸せな気分になつた。そして、幸せな気持ちにさせてくれた樹にお礼をするため、寝ている樹にファーストキスをしてあげた。もちろん、これを言うと調子に乗り過ぎるので樹には秘密である。